

## 平成28年度第2回 門真市総合教育会議 議事録

**開催日時** 平成29年1月27日（金） 午後3時00分～午後3時47分

**開催場所** 門真市役所本館2階 大会議室

**出席者** 宮本市長、久木元教育長、長澤教育長職務代理者、桜井教育委員、土川教育委員、高橋教育委員

**関係者** 中迫副市長、森本教育次長、満永学校教育部長、柴田生涯学習部長、内田こども未来部長、山口学校教育部次長、八木学校教育部総括参事、岡生涯学習部次長、南野こども未来部次長、西岡教育総務課長、三村学校教育課長、高山学校教育課参事、黒木教育総務課長補佐、永田教育総務課主査

**事務局** 河合総合政策部長、大矢総合政策部次長、橋本企画課長、渡辺企画課長補佐、野澤企画課係員、藤井企画課係員

傍聴者；4名

**議 事**

事務局（橋本企画課長）

定刻となりましたので、会議を開催させていただきます。

本日は、ご多忙の中、平成28年度第2回「門真市総合教育会議」にご出席いただき、ありがとうございます。

本日司会を務めます、総合政策部企画課長の橋本でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、配布資料の確認が終了しましたら、主宰者である宮本市長による議事進行を考えておりますので、よろしくお願いいたします。

なお、総合教育会議は、法律により原則公開することとなっており、本日は公開で開催いたしますので、ご了承のほどお願い申し上げます。

また、ご発言に際しては、お手元のマイクのボタンを押して行っていただきますようお願い申し上げます。

はじめに、開会にあたり、宮本市長より一言ご挨拶を申し上げます。

宮本市長

本日は大変お忙しい中、平成28年度第2回門真市総合教育会議にご出席賜りまして誠にありがとうございます。

また、平素から本市の教育行政についてご尽力いただいておりますことを、心から感謝申し上げます。

さて、前回の第1回総合教育会議では、「本市の教育行政の方向性について」を議題とさせていただき、私の教育に対する思い、そして、教育委員の皆様の率直なご意見やご感想を賜ることができ、誠に有意義な会議であったと思います。

本日は、「きめ細かな指導を実現する35人学級事業について」という案件で、この総合教育会議の場を持たせいただきました。私の本事業に対する考え方をお話させていただき、また、それに対する皆様のご意見を賜りながら、議論を深めてまいりたいと考えておりますので、よろしく願い申し上げまして、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。

事務局（橋本企画課長）

次に、議題に入ります前に本日配布の資料の確認をさせていただきます。

具体的に申し上げますと、

1. 地方教育行政の組織及び運営に関する法律（抜粋）
2. 門真市総合教育会議会則
3. 門真市総合教育会議の会議公開要領
4. 門真市総合教育会議の傍聴要領

以上でございます。

不足などございませんでしょうか。

揃っているようですので、これより議事の進行を宮本市長にお願いしたいと存じます。それでは市長よろしく申し上げます。

宮本市長

それでは、ここからは、私の方で進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

まずは、案件1の「きめ細かな指導を実現する35人学級事業について」であります。

本事業を議題とさせていただきましたのは、この35人学級という事業によって、実際の学級構成の人数が、少人数になりすぎるケースが危惧されます。この事業のあり方につきましては、教育委員会の見解をお聞きしつつ、議論を深

めていくことが必要であると感じたからであります。

「門真市の教育行政の方向性について」を議題にした前回のこの会議の場で、門真の子どもたちについては、粘り強さ、我慢強さ、辛抱強さといった将来子どもたちが生きていく上で、必要な芯の強さといった「生きる力」みたいなものを身に付けていてもらいたいとお話をさせていただきました。

そのためには、発達の段階に応じた社会との様々な関わり、特に集団生活での色々な子どもたちと接し、様々な経験を積むことが、非常に重要だと考えております。

40人が多すぎるということであれば、30人前後になることについては、やぶさかではありませんが、場合によって、35人学級ということになりましたら、20人を割るような少人数のケースが出てきます。これは35人学級のある意味の弊害になるのではないかなど、私自身は感じている次第です。

国や府が対象としている小学校低学年1・2年生であれば、少人数学級で個々の対応に重点を置いて、しっかり対応していくというのも理解できるのですが、本市が独自に対象としているのは、小学校高学年の5・6年生、そして中学校1年生というところでありまして、この学齢は先ほど申しましたとおり、集団生活における多様な関わりの中で、社会性を身に付けることが非常に大切な時期だと考えております。そういった面で、この少人数過ぎる学級の構成というのはあまり望ましくないと思っているところです。

このような、私の考える課題について、どのように対応していくことが望ましいのか、場合によっては、教員の加配の考え方も様々ありえると思えますし、違う手法で考えていったほうが良いのではないかとも思ったり、教育委員会の委員の皆様のお考えをしっかりと伺いさせていただきながら、また、今後の教育委員会内における議論も深めていただきたいと思いますと思っている次第でございます。

この度、29年度予算編成を行う中で、本事業について、このような認識のもと、どのように判断すべきか、企画や財政部門とも様々な調整を図ってまいりました。

結論といたしましては、29年度につきましては、教育委員会の要求どおり、継続する方向で考えております。

しかし、次年度以降の事業計画につきましては、先ほど申しあげました疑問等を含め、課題をしっかりと解決していく必要があります、本市の教育にとって更なる向上に繋がるような事業のあり方を考えていただきたいと思います、検討していただきたいと思いますと思っております。どうかよろしくお願い申し上げます。

それでは、ただ今、私の考えを述べさせていただきましたが、皆様からご意見、ご感想などいただけますでしょうか。

久木元教育長

まず事務局の方に確認いたしますけれども、20人以下のクラスが発生しているという現状等について少し説明していただけますでしょうか。

高山学校教育課参事

では、事務局より説明させていただきます。

今市長からご指摘いただきました20人程度の学級が生じるというケースは、主に40人学級編制で考えた際に、1クラスとなるようなケースの学年だと考えられます。

そういった意味で、本来1クラスである36人から40人の学級を、これまでの学級編制で市費の任期付教員を配置して2クラスに分割したケースは、平成26年度におきましては2学年、平成27年度におきましては2学年、平成28年度につきましても2学年、来年度このまま同様の事業を実施した際にも2学年という見込みでございます。

ただ、20人を切ったかどうかという部分につきましては、支援学級在籍児童を入れて計算しますと、過去に20人を切ったケースはございません。来年度、平成29年度の現時点での算定によりますと、ある小学校で20人と19人というクラスに分かれるということが予測されますので、初めて19人学級が生まれる可能性がございます。以上です。

久木元教育長

この35人学級の制度ができたのは26年度からということで、今年で3年目を迎えるわけでございます。

目的がまず、学力向上といたしますか、子どもたちにとってきめ細かな指導を進めていくという目的でできたものだと思うのですが、事務局の方で、この制度についての効果検証について、少し確認してから議論させていただきたいなと思います。

満永学校教育部長

学校教育部長の満永でございます。

検証といたしまして、基本的に定性的な検証は毎年行っております。学校の教員にどのような効果があったと見られますか、というような事はお聞きしています。いわゆる、教師の目が行き届きやすくなったというようなこと、それからその分きめ細かな生徒指導の面では、定性的な面では効果が上がっていると聞いておりますが、定量的な面ではなかなか測定するのが難しい部分がございます。

いまして、定性的な部分ではそういった効果があったと学校からも上がってきておりますし、我々もそのように見ております。以上です。

宮本市長

はい、どうぞ。長澤委員

長澤委員

明年度も引き続いて35人学級の小5、小6、中1について維持していただけたらとお伺いしまして、大変感謝いたしております。ありがとうございます。

国や府の制度に乗った小学校低学年のいわゆる35人学級編制につきましては、就学前の多様な子どもたちの経験、あるいは多様な施設といいますか、いろんな幼稚園、いろんな保育園から小学校1年生に入学して参ります。その場合に、人間関係づくり等につきましては、かなりの効果が上がっていると聞いております。

本市の独自の小学校高学年に対する施策ですけれども、先程から話しておりますとおり、当初の目的は学力向上にあったわけですね。とにかく、文科省のテスト、あるいは最近はチャレンジテストなども含まれているのですけれども、学力が他市と比べて極めて低いということからの施策であったような記憶が残っております。それと合わせて小・中の連携ですね。いわゆる「中1ギャップ」と言いますか、中学校1年生に上がった時に、教科担任制に変わるとかですね、クラブ活動があるとか、いろんな学校の子が集まってくるというところで子どもが悩んだりする、いわゆる「中1ギャップ」の解消、あるいは安定した学校生活、特に生徒指導面ですけれども、そういうところも狙いの中にはあったかと思っております。

効果検証につきましては私も尋ねたかったのですけれども、先程教育長がお尋ねになりましたのでもうそのあたりは省いて、あえて結論のほうに持っていきたいのですけれども、市負担教職員の本市の採用というのは、府下の各市と比べますと比較的早く導入されたわけですね。近年では他市も推奨してやっておりますけれども、そういう中で例えば、財政的な事情があるとか、効果検証があまりできていないのではないかということを経験として、全面的に撤退するということは極めて残念な気がいたしております。

先程市長がおっしゃっていましたが35人学級でありますとね、18、19というようなクラスが出てきますね。それについては、私も疑問を感じているんですね。少なければ少ない程良いというものではないと思っております。

市長が先程おっしゃったんですけれども、府県別で見ますと、30人を1つの学級として編制している取組をしている県がいくつかあるわけですね。だから

35人ですと18、19という20人足らずの学級が出てくるわけですが、ひとつ30人を目途にするという施策を講じますと、その辺は是正されると思うのですが。

例えば本市として、30人程度を1つの目安として、市費負担の教職員の採用を講じるとかですね、あるいはそれぞれの学校にいろんな問題点や課題点を抱えておりますので、これも前から私がよく口にするんですけれども、「特色ある学校づくり」、現在門真で教育研究指定を10校前後毎年指定してるのですけれど、ただこれは財政的な援助だけなんです。今、1校30万でしたかね。

宮本市長

はい、満永部長。

満永学校教育部長

研究指定につきましては、9校指定するのですが、1年目・2年目が20万円、3年目の最終年度が30万円となっております。

長澤委員

結局その20万、30万というお金も資料代であるとか、講師を呼ぶ謝礼に使われてしまうんですね。だから人的な配慮ということにつきましては、府の特別な配慮は別途あるんですけれども、市としては以前にやってこなかったと。だから「特色ある学校づくり」を一つの目標として配置するのも一つの方法ではないかなと思います。

例えば、生徒指導の充実のためとか、部活の活性化のためとか、あるいは安定した学校生活を送るためのスーパーバイザー的な教員の配置、加配の教員をスーパーバイザーにするのではなく、各学年に優れた教師がいるわけですね、スーパーバイザー的な立場の教師もおりますので、そういう人をそっちのほうに主に関わってもらうために、交代要因として市の教員を配置するとか、そういう方策があるのではないかと考えております。

その内容につきましては、各学校の方からプレゼンをしてもらって、そのプレゼンを精査した上で、教育委員会でこの学校に配置しようかと決めるというような方策も一つの手立てではないかと思っております。ただその場合、1年後には確実に検証する必要があると思っています。だからプレゼンを受けて、校長、教頭がそれを検証して、こちらに報告する義務が当然生じるわけですから、そのプレゼンと検証結果を報告することによって、次年度以降をどうするかということをもたまた考えていけると考えております。

今後、市長が様々な意見を聞かれると思うのですけれども、それを市長の英

断をもって、何らかの形で続けてやろうとおっしゃるのでしたら、我々教育委員、教育長を含めまして、教育委員の中で意見をまとめまして、具体策を提示したいと思います。

ただ、この件につきましては、教育委員は一切話し合っておりません。35人学級につきましてはね。だから今日、他の委員さんもおっしゃると思うんですけど、あくまでも1人1人の意見で食い違う部分もあるかもわかりませんが、その辺をご了承頂きたいと思います。以上です。

#### 宮本市長

ありがとうございます。基本的には、再度申し上げておきますが、今言われますように、35人学級というのに関しては、学力向上で導入されて進めてこられたと。これまでもお話しさせていただいておりますが、門真市において学力向上というのは非常に重要な課題ではありますけれども、それが全てではないということもこれまでお話しもさせていただいておりますし、その理解も十分教育委員の皆さんとも共有されているのかなと思っております。

今回ですね、35人に関しては一応進める方向でと考えてはおりますけれども、やはり効果検証というのをどうしていくべきかというのは大きな課題ですし、より門真の教育の充実につながるような施策を考えていただかないといけないのかなと思っております。単にワードだけですね、35人という言葉だけが先行してしまうというよりは、門真の実態に応じた今の学校のあり方というのを考えていくべきなのかなと思っておりますので、自由なご意見で結構ですので皆さんよろしく願います。土川委員。

#### 土川委員

今日はこういう会議をもつていただいてどうもありがとうございます。

市長のご指摘、20人以下になってしまうことによる弊害がないのだろうかという意見に対して、ある程度は納得できる部分も実はあります。

そこで先日1月18日でしたか、はすはな中学校の研究発表会がありまして、参加させていただきました。みんな先生方が一丸となって学習に、それから人間としてのあり方ということに対して教育をされておりました。

1年生のクラスを見せてもらったのですが、1クラス30人でされておりました。その教育の仕方というのが、対話を取り入れるとか、自分の意見を持つという学習の仕方、以前に先生の方から教えるという教育からは隔世の感がございました。そういうことをしていく為には、やはり35人学級ということも必要ではないかなと。ゆとりをもって、一人一人に考えさせて自分の意見を持つていくという、中教審の答申にもあることかと思うのですが、教育というのは

その子に一生身に付くものであるので、きめ細かな指導が損なわれることのないように、存続を希望したいと思います。

それから、35人学級をこの市でされているということですが、実はあまり教育委員に入るまで知らなかったということが、私の場合はあります。

他市ではちょっと問題が変わりますけれども、子どもの医療無料化を、中学校くらいまで北河内ではされて、そのことに目が行っているように思いますけれども、門真の35人学級ということの宣伝というか、そこで取り組んでいることを、もう少しよく示していくということも必要ではないかと。保護者の方々、市民の方々に教育のあり方を示していくということも必要ではないかなと思います。

宮本市長

ありがとうございます。せっかく35人学級をしているのに門真の人にすら知られていないのなら、北河内含めて大阪府下で十分知られていないこともあり得るということですね。ありがとうございます。

他にご意見ありますか。

久木元教育長

土川先生が今おっしゃいました件の前半の部分でございますけれども、これも聞きかじりでございますけれども、東大への日本一入学を誇るような開成高校や灘高校というような学校では、大体授業が1クラス開成高校で50人、灘高校で1クラス55人という、そういう授業をしていると聞いております。目的がひとつ、子どもたちがしっかりして自学自習の習慣がついた、そういった部分については、こういうやり方は一斉講義方式といいますか、従来型の授業でも成り立つのかなという気はいたしますが、門真における小中学校等義務教育において幅広い学力の子たちがいる中で、そういう大人数の一斉講義型の授業というのは、これからの時代にはどうなのかというのが、国における最近の見直しの動きになっているのかなと思います。

昨年12月末に中教審の方で答申が出て、これから新しい新学習指導要領をめざす中で、本当に今、委員がおっしゃいましたはずはな中学校で行われました対話型、あるいは主体的に学ぶというようなそういった授業が、これから求められる時代に来ているのかなという気がいたします。単なる知識を植え付ける授業だけでなく、子どもたちが習得した知識をどう生かしていくかということを考える授業とか、あるいはその思考力、判断力、表現力という、そういった部分が求められていると。これが今、国における考え方の主流なのかなという気がいたしております。そういった中で、小学校中学校における少人数という

のは、意義のあるものかなという気がいたします。最近の国の動き等について、もし事務局が補足することがございましたらどうぞ。

宮本市長

はい、満永部長。

満永学校教育部長

学校教育部長の満永でございます。最近の国の動きについて、先程教育長がおっしゃいましたように、中教審答申が出まして、近々に、学習指導要領が変わっていくという中で、やはり主体的な学び、対話的な学びに、深い学びということが言われております。

先日のはすはな中学校の授業もいわゆる対話的な学びを重視をしていました。今後深い学びをどうしていくか、学びを振り返ることをどうするのかというのは課題だとなっていましたが、今後やはり学習指導要領が変わる中で、授業の形態は当然知識注入型からそのようにアクティブに勉強していくという形になってくると思います。その中でとりわけ小学校においては、やはり少人数で子どもたちがそういう発言をしたり、対話をしたりする機会を多く与えられるという意味では、一定、少人数でやるということも意義のあることではないのかなと考えております。以上でございます。

宮本市長

ありがとうございました。他の皆さんからいかがでしょうか。ご意見ございましたら。

桜井委員お願いします。

桜井委員

いくつかお話があったように、学校の状況を現実に考えたときに、現場にもよるんですけれども、非常に忙しくて夜なかなか帰ることのできない先生方の状況があります。いわゆる多忙化というやつです。このままの仕事の仕方、35人学級をやめるというのは無理があると思っています。それがまず1つ。

もう1つは、逆に今の仕事のやり方を新しくするのならば、可能かなと思っています。それは仕事のやり方を新しくするというのは、親も理解してもらえないと困るし、教員や教育委員会も共有しなければならないという大改革になるんです。それは、もう少し前は当たり前のようにやっていたやり方なので、それを取り戻すような質の話が必要になってくるということです。

それは3つぐらいあって、1つは、例えば今子どもが怪我をしたら必ず親に

夕方とか夜に電話をするんですね。そんなに大きな骨折とかでなくても、怪我をしたりけんかをしたりしたら先生方は保護者に必ず電話をされる。そういったことって、学校現場ではごく最近の話なんです。それまでは、先生が電話をするのではなくて、子どもたちに「自分でお父ちゃんお母ちゃんに言うておいで」というサポートをしていたのが、全部子どもを飛び越して親にというのは、親が「怪我して帰ってきましたから」と言うてくるのを防ぐために、前もって前もって大事をとるっていうことが、一方で多忙化に拍車をかけているんですね。本来は子どもたちが自分で言えるようなサポートをすとか、そこまで神経質にならないというのを取り戻せるかどうかはまず1つ。子どもにも失礼ですしね。

もう1つは、大阪市の「みんなの学校」で有名になりましたけれど、障がいのある子どもたちがいるときに、障がいのある子どもの個別指導じゃなくて、映画の中では「僕がいるから先生おらんでも大丈夫やで」というような関係性を、教室の中に大阪は育ててきた老舗なんですけれども、それが取り戻せるかどうかです。今はもう個別に先生が全部対応するので、先生の多忙は更に雪だるま式に大きくなっているのですが。だから関係を育てる支援を取り戻せるかどうかは2つ目。

3つ目は、今の多忙化の1番が保護者対応で、2番が先程の効果検証のアンケートが多忙化のNO. 2なんですけれども、実際に先生方が人数が多くなって大変になるのは、丸つけとそれから連絡帳のお返事とそれから保護者対応が一番大変になってくるので、それをどンドンきめ細やかにやり過ぎないということが、もっと子どもたちを信頼して委ねるということに戻れるかどうかにかかってくるので、実はその3つというのは相当大きな今までの現場のどンドンきめ細やかになっていった所の、深く考え直すということが問われてくるので、大事なことと思います。それらが実践できるのならば、あり得るのかなという意見です。以上です。

宮本市長

ちょっとお伺いしたいんですけど、その、今言われている部分というのは、今学校現場の先生方というのは、以前に比べて若い方が増えていますよね。そういうふうな面での経験不足というか、その辺のところの研修をしっかりとやることによってできるようになるのか、若しくはその年齢と経験との関係性があるのか。それとも、どちらかといえばその先生自身の考え方というか、もう少し子どもに委ねて自発性をとるところは、どちらかといえばそういう経験不足とか年齢的などころでくるのか、先生の個人的なキャラクターというか、個別の能力によるところなのか、どちらが要因として大きいですかね。

桜井委員

あの当たり前のように同僚制の中で文化として伝達されていたのができなくなっているのと、それから今の若手の教員はきちんとするというふうに研修を受けているので、丁度いい加減が人を育てるのが、もう全然ゼロになっているので、そういう意味ではちょっと厳しい。しっかり考えてそれを取り戻さないと、研修ですぐ身につくような話でもないかもしれない。かなり構造的だと思います。

宮本市長

頑張り過ぎているということですね。その辺実態的には何か、教育委員会の中でありませうか。今のご発言は非常に1つの角度だと思うんですけども。

はい、長澤委員。

長澤委員

私2つ3つ今保護者の方と関わっているんですが、保護者の意識がそうになっているんですね。学校がサービスするのが当たり前。例えばそういうことは、子どもさんの口から言わせて下さいといった一言がトラブルとなっているケースが今あるんです。子どもに言わせると、なんで学校が言ってこないんだと。親に言ったらなぜいけないのかと。教員の場合は、子どもの意思を尊重したいと。子どもが言ってきたら、子どもとの対話も弾みますし、子ども自身の納得させる手立てを先生は持っていると思うんですけどね。だから親の認識ですね。

例えば不登校が起こりますね。学校が迎えにくるのが当たり前。しかも校長が来いと。子どもが不登校になったのは担任のせいだと。原因は分からないんですよ。校長が謝罪も兼ねて迎えに来いという親がいるのも事実です。だから親の意識が相当変わってきていますね。だから親を変えるのは私はかなり難しいと思います。以上です。

宮本市長

はい、満永部長。

満永学校教育部長

先程おっしゃられた保護者対応というのは非常に沢山ございます。その学校での対応が悪いということで教育委員会にもかなり入ってきています。その内容はやはり、不登校になったのは学校のせいだから迎えに来ない、迎えに来い

と言っても来ないとかいうのも確かにございます。一方では、教員の対応の経験の浅さから来ている部分とかも、正直あるなど。あるいはもう少しこの子どもの眩きを聞いて欲しかったなという部分もございますので、私どもとしては、研修がかなり桜井先生がおっしゃるように、教員の多忙化に繋がっていくということで、色々研修を精選していかなければならないと思っておりますが、一定、子どもの背景とか、今日子どもが暴れているのには必ず理由あるとか、家で何かあったかもしれませんよね。お父さんお母さんがけんかして来ているのではないとか。あるいは朝御飯食べてないんじゃないのかなとかいうことを、ちょっと片隅に置きながら子どもと対応することで、若干変わってくる部分もあるのかなと思うこともございますので、そういった子ども理解をしっかりとしていこうというようなことについては、やはり研修などで、一定教師には伝えていくべきかなと、私ども事務局としては思っております。ただ研修も一定有効ではないかなと思っておりますが、ただ、桜井先生がおっしゃるように、そのことで逆に丁寧になり過ぎて教員が多忙化になっているとすれば、私ども非常にジレンマを感じるところでありますが。やはり最低限、この子どもの行動の背景に何かあると。この保護者が言ってくる背景にも何かあるということについては、思いをいたしながら、子どもと向き合うという資質については、きっちりと教員は身につけるべきではないかと私は思っているところでございます。

宮本市長

ありがとうございます。高橋委員、何かご意見ございましたら。親の立場で。

高橋委員

今お話伺っている限りではおそらく、35人学級を受けている子どもたちも保護者も続けてほしいという意見が多分多数じゃないかなと。いろんな本来しなければいけないサービスでないことも先生方がしてくれるという、そういう方向に向かうのであれば、問題ではないかなというのは僕自身は思いますし、ただそういうことではなくて、本来の学力向上という意味でこの35人学級が継続できるのであればやはりできればしていただけたらなと子を持つ親としての意見としてはそういう感じだと思います。実際、3年間しかまだやっていないということで、学力向上がどの程度その3年間であったかどうかというのはなかなか難しい、判定するのは難しいと思いますし、もう少しやはり期間を見て効果があったかどうかというのは、検証をするべきではないのかなと思います。

宮本市長

ありがとうございます。他にご意見はございますでしょうか。

1つにはいくつかお話のあった中で、もう少し確認させていただきたいと思うのは、35人学級自体がまず1つは、効果のことですね。学力向上という観点でスタートして、それがどう繋がったかという検証を一旦まとめていただかないといけないのかなと思う点と同時に、先程申し上げました私自身が一番危惧しております、要は数が少な過ぎる、1クラスの編制が少な過ぎることによる、例えば弊害というのが、今後起こり得るのかなというふうにも思っております。これまでのお話では、20人を切る学級というのはなかったわけですが、来年明らかに20人を切る学級が出てくるということが明らかにもなっていますし、こういった点での課題をどのように解消していくかというところで、先程一番初めに長澤委員の方からもお話がありましたが、30人程度とかいうような弾力的な運用というのはできるものなんですか。その辺のところは、行われている事例というのはどんな形であるのか、分かる範囲で事例があればお願いいたします。

はい、満永部長。

満永学校教育部長

その30人と申しますが、30人学級という。

宮本市長

30人学級という、運用の中で要は30人程度というところで、長澤委員の方から一番初めの時の話ですね。

長澤委員

秋田や北のあたりで20人前後を目途にする学級が。

宮本市長

秋田とか北のあたりですか。要はそれで20人くらいに人数が減りすぎないように調整をしているということですね。

長澤委員

あまり減りすぎると好ましくない。弊害の方が多いので、30人くらいの編制にしよう。それはできると思いますけれども。市で独自にするのであれば。

宮本市長

そういった事例の研究というのも含めてしていただければと思うのですが、

いかがですか

満永学校教育部長

今後次年度に向けても、当然この事業をきちっと検証していく中で、そういう事例を研究していきたいと思います。

宮本市長

合わせてこの機会にもう一度、私の方からお話しさせてもらいたいなと思っているんですが、結果的にですね、特に中学校の場合でしたらそれほど大きなケースはないのかもしれませんが、小学校の方になりますと、20人を切るような学級が出てくる、学年が出てくるというケースはどうしても小規模校での課題になってくるのかなと思っています。こういった点も含めてですね、一度教育委員会の中でもご議論をいただけるようにしていただければなと思っていますところですが、何かこの辺に関してご発言はございますか。

久木元教育長

今市長がおっしゃられました効果検証につきましては、きっちりやっていきたいと思います。ただ、色々学者なんかでも少人数授業等についての検証結果といますか、研究されているようですけれども、因果効果はあるもののそれが本当に費用対効果としてはいかがなものかという研究結果もあるようでございますけれども、我々といたしましては、やはりこの貴重な財源といますか予算の中での効果的なあり方というのは、見直していく必要があるかと思えますので、取り組んでいきたいと思います。

あと市長がおっしゃいました小規模校ですね。確かに来年20人を割るクラスが生じるのは……。

高山学校教育課参事

1学年が1学級となる部分を2つに分けた時が、小規模、20人を切るような学校になる可能性がございます。

久木元教育長

1学年が1学級になる学校においては、少人数学級が生じるということでございますので、今小規模校として何校か1学年が1クラスというような小学校が出始めてございます。これにつきましてはですね、本当に子どもたちの学力という観点もございますけれども、またその学校運営、あるいは教員にとってもこういった学校のあり方はどうなのかといったこととか、多面的にあり方を

見直していく必要もあるのかなと考えております。

そういった中で、色々な課題が教育委員会だけでなく、審議会の力もお借りし色々な意見をお伺いしながら、研究も深めてまいりたいと考えております。

宮本市長

そろそろまとめに進めていきたいと思うのですが、この機会にご発言いただくことはございますでしょうか。

そうしたら総括をさせていただきたいと思いますが、私の方から改めて整理をさせていただきますけれども、今日のご発言の中でありましたように、まず学力向上というところでこれまで35人学級というのは進めてこられたわけですが、その効果検証を今後しっかり行っていただきたいと思っております。

合わせて今、委員の中からもご発言がありましたように、学校現場で例えば保護者の対応のこともそうでしょうし、子どもとの関わり方など教員が抱えている課題というのは沢山あると。そこで、多忙化をどのように解消していくかというのは非常に重要な課題ではあると思いますが、これは35人学級を続けることによって、多忙化が少しでも防げるのか、むしろそうでなくて新しい違う運用、もっと弾力的な教員の加配のあり方とか、また保護者との関係性、子どもとの関係性、教員の意識をどういうふうにつかというところも含めて、一旦教育委員会の中でその辺の整理をですね、やはりしていただく必要があるのかなと思っております。

僕自身は改めて申し上げますけれども、学力向上というのは非常に重要な課題ではありますけれども、それだけが学校現場に公教育として与えられるものではないと思っています。子どもたちがどのように育っていくかということが、一番重要な課題になっていくわけですが、そういった点を踏まえて、この35人学級のあり方というのを今年度は予算の中では認める形では進めていこうということで考えてはおりますが、当然ここは議会との議論も含まれてきますが、これが全てであるとは思っていないところはあります。是非この辺を踏まえて、皆さんにはより門真の教育のあり方ですね、議論を深めていただきたいと思っております。このことに関して、教育長の方からご発言ございますか。

久木元教育長

今市長からご提案いただきました、きめ細かな指導を実現する35人学級、或いは教員の多忙化問題も含めまして、本市の教育にとって更なる向上に繋がるような事業のあり方、これにつきまして現在行っております、魅力ある教育づくり審議会等で議論を行いまして、教育委員会といたしましても、検討を深めてまいりたいと考えております。よろしくお願ひしたいと思ひます。

宮本市長

ありがとうございます。あとこの機会に事務局の方からご発言ございますか。  
はい、満永部長。

満永学校教育部長

今日は貴重なご意見ありがとうございました。

先程教育長が申しましたとおり、魅力ある教育づくり審議会を現在行っているところでございます。前回1月17日に2回目があり、2月17日に3回目がございます。今後鋭意続けていきたいと思いますが、その中でもここでのご意見を踏まえながら、市民の皆さん、或いは学識の皆さん方にも検討していただこうと考えております。

宮本市長

ありがとうございます。以上ではありますけれども、折角の機会ですので、もしご意見とかがありましたら、この機会ですのでご発言ございませんか。よろしいですか。

それではありがとうございました。教育長、教育委員の皆様から率直なご意見ご感想を賜り誠にありがとうございました。今後、私の考え方ここでの協議を基に教育委員会としてですね、更に議論を深めていただきますようよろしくお祈いします。以上をもちまして案件1、きめ細かな指導を実現する35人学級についての議論を終了させていただきます。

次に、案件2の「その他」何か教育委員の皆様から提案事項がございましたら、ご提案をお願いいたします。何かございませんでしょうか。

ないようです。事務局から何か報告はございませんか。

事務局

ございません。

宮本市長

それでは、これもちまして本日の会議を終了とさせていただきます。誠にありがとうございました。